

JASSO海外留学支援プログラム報告 マルメ大学SSSV報告

新潟大学医歯学総合病院歯科医師研修Bコース 田村 光

私は歯科医師1年目、新潟大学医歯学総合病院歯科医師研修Bコースにて、今は群馬県高崎市にある協力型臨床研修施設で研修しております。日々悪戦苦闘しつつも、一人前の歯科医師を目指して一生懸命診療・研修に励んでおります。

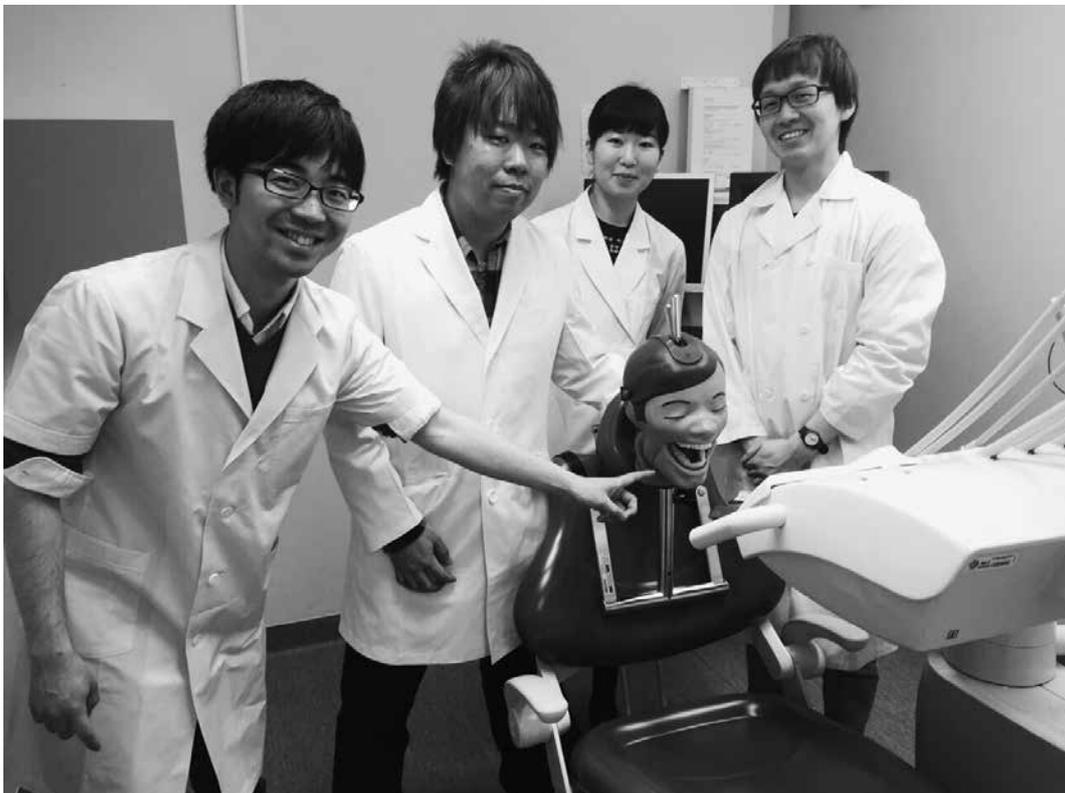
この度は、今年3月に日本学生機構（JASSO）による留学生交流支援事業（SSSV）のプログラムに参加し、スウェーデンのマルメ大学を訪問させていただきましたので、そのご報告を致します。

マルメはスウェーデンの中でストックホルム、ヨーテボリに次ぐ3番目の都市で人口は約30万人、場所はスウェーデン最南端に位置する港町で

す。また、150カ国以上の国から人々が集っており、多国籍多民族な都市です。そのような背景もあってか、マルメ大学歯学部にも様々な国出身の学生がおり、また私たちのような留学生も多かったです。

スウェーデンは世界的にみても予防歯科が進んでいるとされているようで、マルメ大学歯学部もカリオロジーをはじめとした予防歯科学や、教育分野ではPBLを積極的に行っていることで有名です。

私たちはマルメ大学にて、病院の診療室の見学や学生の実習や実習施設の見学、PBLの見学やマルメ大学での教育についての講義や、予防歯



左から筆者、研修医の小松貴紀先生、5年生の松崎奈々香さん、研修医の都野隆博先生

科、カリオロジーについての講義、さらにはインプラント手術などの見学をさせていただきました。

全て貴重な経験となりましたが、その中でも特に印象に残ったことが3つあります。

まず1つ目はPBLについてです。マルメ大学のPBLでは全員がとても積極的に参加し、自信を持って発言しているように感じました。新潟大学でも5年次に行われており、私たちもPBLでの学習をしましたが、意見を言い合う時などは個々によって発言量が違った印象があったので全員が積極的に発言を行っている状況はとても印象的でした。

2つ目はカリオロジーと予防歯科学の講義についてです。歯を顕微鏡で見て拡大していった場合どのような構造が見えてくるのか、それに対して細菌はどれくらいの大きさなのかという話や、歯磨きの回数や生活習慣などの質問を答えていくとどの部分が特にう蝕のリスクを上げているか表でわかるシステムについて講義していただきました。特に印象的だったのはう蝕がどこまで進行したら、修復治療を開始するのかという話です。スウェーデンではC2でう蝕が象牙質の厚さの半分以上進んだくらいになったら治療を開始すること、またそれが可能な理由は多くの患者さんが定期的を受診をしているからだとおっしゃっていました。

3つ目は医療保険制度の違いから治療計画も変わってくることです。スウェーデンでは20歳までは歯科医療は無料で、それ以降も年齢に応じて補助金が出ます。また、1年間の歯科医療費が高額だった場合もそれに応じて補助金が最大85%まで出されます。さらには日本では保険外治療であるインプラントが保険治療として行われています。このことから、例えば大きな根尖病巣があり、貼薬や根充後に比較的長く経過をみななければならない症例などでは1年間で治療が終了するように抜歯してインプラントという治療の流れも多いそうです。

マルメ大学の学生や他の国々からの留学生との交流もとても貴重な経験となりました。マルメ大学の学生はみなとても親切で優しく、休日には電車で30分の隣国デンマークのコペンハーゲンに連れて行ってくれたり、自分の家に招いてくれた学生もいました。また、他の留学生との会話も含めて、はじめて日本や自分が日本人であることを真剣に考えるきっかけとなりました。しかし同時に自分自身の英語の能力の足りなさを実感しました。どの国々出身の学生も英語が堪能で、海外での英語の重要性を強く認識させられました。これからでも努力して身につけていきたいです。

最後にこのような貴重で有意義な機会をあたえてくださった、魚島先生、宮崎先生、小川先生、石田先生ら諸先生方、右も左もわからなかった私たちを引率してくださった前川先生、この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。



マルメ大学の中庭にあるポッセルトの図形の銅像

JASSO海外留学支援プログラム報告

スイスSSSV報告

歯学部歯学科6年 金子 絵里奈

2016年3月13日～22日の10日間、SSSVプログラムの短期海外派遣で、スイスのジュネーブにある世界保健機関（WHO）本部に派遣されました。スイスは、フランス、ドイツ、イタリア、オーストリアと接するヨーロッパの内陸国で、地域によって公用語も文化も生活様式も異なります。今回派遣されたジュネーブはスイス西部、フランスとの国境がある都市で、公用語はフランス語でした。またスイスは世界一物価の高い国と言われていますが、実際その通りで、私たちは宿泊先としてフランス国内のホテルを利用し、毎日バスで国境を越えてWHOに通いました。

私たちのプログラムのスケジュールは図1に示した通りです。WHOで活躍されている様々な職種の方から講義を受けたり、サンスターや国際赤十字社に出向いてお話を聞いたり見学をさせていただきました。全ての内容を紹介したいのですがスペースの関係もありますので、今回はWHOという機関について詳しく書かせていただきます。

まずそもそもWHOとは何を行っている場所なのか、明確に答えられる人は少ないのではないで

しょうか。WHOは健康に関する国際連合の専門機関として1948年に設立され、現在194か国が加盟しています。可能な限り高いレベルの健康を達成することを目的とし、国際保健に関する仕事に対する指導、調整の権威として活動します。主要機能としては①リーダーシップの発揮、②規範と基準の設定、③技術支援・能力開発支援、④研究課題の形成、⑤政策オプションの明確化、⑥健康動向の把握のモニタリング、が挙げられ、主要分野としては感染症、非感染症、生涯にわたる健康、保健システム、危機管理があります。日本には厚生労働省がありますが、「世界の厚生労働省にあたるのがWHO」と考えるとイメージしやすいかもしれません（小川先生の言葉をお借りしました）。

WHOは194の加盟国がお金を出し合って運営されているということですが、そのことを象徴するものを建物内で発見することができました。写真1はWHO内の大理石の床なのですが、写真に写っている限りでも3種類の大理石が使われていることがわかります。この建物を建設するとき

March		AM	PM
14	MON	WHO Guidance WHO tour	City sightseeing
15	TUE	visit Sunstar	Oral Health Traditional Medicine
16	WED	Health Financing Policy Tobacco Control	visit IFRC
17	THU	School Health Food Safety	Career development Junior Professional Officer (JPO) Program
18	FRI	Oral Health Information Technology	Coffee Time
19	SAT	Free	
20	SUN	Free	
21	MON	City sightseeing and Preparation for presentation	
22	TUE	Presentation and Discussion	Dep Geneva

図1



写真1

に、いくつかの加盟国がそれぞれの国の大理石を提供した結果このようになったそうです。

プログラム全体を通して学んだのが、世界で動くためには「文化」を考えなければならないということです。日本で生活しているとなかなか感じることもない文化の違いを、自分の考えの中に盛り込むにはある程度の訓練が必要であり、これは日本だけで生活していたら気づけないことなので、貴重な概念を与えてもらえました。また、日本人であることの強みがあることを知りました。日本人は内向的で個性が少ないと言われ、世界で行動するときにはマイナスだと思っていましたが、今回のプログラムでお話をしてくださった方の多くが、日本人は真面目で、よく働いて、時間や期限を守って、ケンカもしないし、まともなことを言う、と外国の方に評価されるとおっしゃっていました。日本人であることが強みになることを知って、日本人であることに誇りを持つようになりまして。また世界規模の話の聞き

て、世界と比べて日本がまだまだ足りないこと、逆に、日本が進んでいることが見えてきました。日本が世界の中でも進んでいるのは、高齢社会に対する概念やシステムであり、その点において日本は今後世界をリードするべき立場にあることを知りました。日本の歯科医師や社会福祉士が世界で活躍できる可能性を強く感じました。

休日は特急でツェルマットへ、その後登山列車に乗り換えてゴルナーグラートまで行きマッターホルンを見たり、首都ベルンのチーズ工場でチーズの歴史や製造過程を学んだりしました。派遣された10日間を最大限に活用し、たくさん学び、たくさんの思い出を作ることができました

最後に、今回このような貴重な機会を与えてくださった方々、このプログラムに関わる全ての方々に感謝申し上げます。特に小川先生には、現地だけでなく派遣前、派遣後に至るまで手厚くサポートしていただきました。心から感謝いたします。



WHO本部前にて



登山列車とゴルナーグラート駅。
奥に見えるのがマッターホルンです

JASSO海外留学支援プログラム報告

短期留学を経て思うこと

歯学部歯学科3年 松田 きよら

私は入学前から、新潟大学歯学部には海外留学プログラムがあるということを知っており、チャンスがあれば参加を強く希望していたが、今回貴重な機会を与えていただき、念願の短期留学に参加することができた。今回、私は三大学合同派遣プログラムに参加させてもらい、東北大学、広島大学、新潟大学の三大学でタイのチェンマイ大学に短期留学してきた。

今回の訪問によって、タイの歯科医療に対して抱いていた、「タイは発展途上国であるから日本よりも医療は劣っている」という私のイメージは払拭された。実際にチェンマイ大学の病院や個人クリニックを訪れてみて、タイは日本よりも衛生面がしっかりしていないという現状が事実としてあるものの、診療技術は確かなもので決して日本より劣っているとは言えないと感じた。また、タ

イでは日本にはない分野であるCommunity Dentistryが盛んだった。これは、地域に出向いて歯科治療や歯科指導を行うという取り組みであり、日本でいう訪問診療のようなもので、日本よりも政府や地方自治体の手厚いバックアップにより発達していた。老人が集まりやすいような施設に病院が併設されていて、ボランティアによる支援も活発であり、口腔保健推進活動にとっても良い環境が整っていた。一方で子供たちは、齲蝕がひどい状況であった。この背景には両親が仕事で忙しく子供に歯磨き指導をする時間や余裕がないこと、知識不足、金銭問題等の重大な諸問題がある。日本では、ある程度小さい頃からきちんと歯磨きをする習慣があり、タイに比べたら子供たちの齲蝕率はとても低い。日本は超高齢社会を迎えていて、ここでタイから学ぶべきことはCommunity



タイの個人医院にて

Dentistry のような取り組みによって、老人たちの憩いの場を提供することだと感じた。各地域に最適な医療を提供するためにも、その地域の状況に対応した医療の在り方を日本はさらに考えていかねばならない。タイの歯科医療現場を見て、日本の歯科医療にも取り入れていくべきことを考えるよいきっかけになったと思う。

タイでの病院見学や地方に行って歯科治療の様子を見るときに、様々な専門用語が飛び交い単語を拾うのに精いっぱいだった私に、上級生がこの患者さんはどんな症状で、今どんな治療が行われているかということを手際よく教えて下さった。これがもし同一学年だけでの派遣だったら一つ一つの状況を理解するのにとても時間がかかったのではないだろうか。この点も学年が様々である合同派遣の良い点であると実感した。三大学合同であることでチェンマイ大学だけでなく国内の他大学との比較もでき、たくさんの違いを発見できた。10日間を共に過ごした東北大学、広島大学の皆さんとも各大学のカリキュラムについて意見交換し

合い、同じ志を持つからこそその刺激を受けることが出来た。国内外で情報の共有ができる繋がりがあるということはとても素晴らしいことである。タイの人々は皆あたたかく寛容で協力的であった。チェンマイ大学の先生、学生もとても親切に対応して下さい、楽しく充実したタイの滞在を終えることが出来た。タイを訪れてみて、日本とは違うタイの良さも感じたし、やはり日本の素晴らしさも実感することができた。

新潟大学には数々の海外派遣プログラムがある。今回の派遣で様々なことを吸収することができ、これからの勉強に対するモチベーションにもなったし、もっと見て知りたいという願望も生まれた。もし次もまたチャンスがあるのなら、英語をもっと学び、今度は先輩から教わるのではなく自分で何かを得られるように勉学に励みたい。最後に、今回のこの三大学合同派遣プログラムに参加するにあたってお世話になった全ての方に感謝の気持ちを伝えたい。



エレファントキャンプにて 本人左